

「魅力ある事業」をどう生み出すか

－研究と実践とのダイナミックな関係－

住 岡 英 毅
(滋賀大学)

新しく、ユニークな、「魅力ある事業」をいかにして生み出すか。それは、生涯学習の推進にあたる行政関係者や社会教育関係者の、中心的かつ恒常的な教育課題の一つである。そうした教育課題に応えるための研究と実践は、どのように関連し刺激あったらよいか。本稿では、まず、「魅力ある事業」を開発するための研究（アイデアづくりとその実証）について私の考えを述べ、続いて、具体的な二つの事例を通して、こうした事業開発に関わる研究と実践とのダイナミックな相互関係について考察を深めたい。

1. アイデアづくりとその実証

「魅力ある事業」を起こすためには、何よりもまず、みずみずしいアイデアをもつことが必要である。だが、これまでの事業は、往々にして過去の経験に頼る傾向があり、そのためこうしたアイデアを欠き、どちらかと言えば先例の踏襲に終始しがちであった。その結果、人々の学習欲求が多様化し高度化しながら変化し続けている今日、その事業の魅力や有効性は、しばしば減退している場合が多い。

では、今日の生涯学習の推進を導く「魅力ある事業」のアイデアとはどのようなものか。それは、次のような二つの方向から追究されよう。

第一に、「魅力ある事業」を生み出すアイデアの種は、人々の実際の学習

場面のなかに潜在している。それは、いくつもの要素が重なり合っているため、たいていの場合は見分けがつきにくい。実際の学習場面に内在する、そうした「魅力ある事業」を構成するであろう諸要素やそれらの働きを析出し、理論化し、それを実践可能な形に再構成したものがアイデアである。生涯学習研究は、人々の実際の学習に寄り添いつつ、そうした諸要素の析出と再構成をおこない、それを「魅力ある事業」を導くアイデアへとまとめ上げなければならない。

第二に、こうして生み出されたアイデアは、現実の教育実践のなかで試されなければならない。そこで、生涯学習研究の次の段階は、そうしたアイデアにもとづく事業を意図的に仕組み、展開し、その評価を行うことにある。それは、いわば「魅力ある事業」の開発研究ということができる。もっとも、この開発研究は、それ自体が新規事業の展開という教育実践そのものでもあるから、事業開発という目的を濃厚に内包する教育実践研究ということができよう。そうした研究は、比喩的に言って、いわば新商品を開発し、それを市場に出し、その商品への人々の反応を探るのにも似ている。

2. 「トリオ学習」の実験的試み

具体的な事例を通して考察してみよう。

少し古い話になる。1970年代の終わり頃、ある特定の学習テーマをめぐって、そのテーマにふさわしい番組を視聴しながら学習を進める、いわゆる「放送利用学習」が、全国の社会教育の中で盛んに行われていた時期があった。そんな折りに、私は、公民館の主事さんと共同で、番組「草燃える(NHK 大河ドラマ)」を利用して「現代女性の生き方を考える」学習会、「トリオ学習」の集いを組織しその実践を試みた。すなわち、身近な3人の学習仲間であるトリオグループを8組募集し、3人トリオによる小集団学習(自宅で気軽に行う)と24人の集合学習(公民館に集まっておこなう月1回の全体学習会)とを有機的に組み合わせた、「トリオ学習を軸とする放送利用学習の集い」を実験的に試みた。この試みの詳しい内容についてはすでに報告済みであるので省略するが^①、ここでその「アイデアづくり」と「実証とし

ての教育実践研究」について述べると次のようになる。

まず、アイデアの源泉はどこにあったか。よく知られているように、人々の集合学習において、とりわけ学習活動が盛り上がる場面は、「話し合い活動」を行っている時である。だが、どのような形態での「話し合い活動」が学習を盛り上げるのか。人数はどのくらいが適当か。日頃からよく見知っている間柄の場合と見知らぬ間柄の場合では、どのような違いが出てくるか。マンネリは、どのような場面で生じるか。それらは、学習会の運営にあたる者の、日々避けて通ることのできない実践的課題である。「トリオ学習」という発想は、そうした課題の中で探り当てた一つのアイデアである。

すなわち、「3人トリオ」という発想、また身近なトリオによる自宅学習という発想は、茶の間のテレビ視聴場面—しばしば盛り上がりを見せるあの場面—に原型を求める事ができる。また、月1回の全体学習会は、見知らぬ相手から情報を得ることで日頃の学習が一層広がるといふ、日常的に経験するあの新鮮な学習場面に発想の根がある。これら二つの要素を析出して組み合わせ、実践可能な理論に構築したものが、「トリオ学習を軸とする放送利用学習のつどい」というアイデアである。

アイデアに即して展開された実践は、その過程で、様々な動きを呼び覚ました。たとえば、3人トリオによる自宅での学習会は、しばしば2つのグループをドッキングして開かれた。また、その学習会に日頃のメンバーでない臨時の学習者が加わることもあった。そうした動きは、放送利用学習を越えてもっと一般的な、「地域学習者集団」形成のためのアイデアづくりといった、研究の新たな矛先を引き出すものでもあった。こうして研究と実践とは、相互に刺激しあう関係にある、と言ってよい。

3 「淡海生涯カレッジ」の実験的試み

次の事例は、比較的最近のもで、生涯学習機会のネットワークづくりに関連している。

1996年7月、私が所属する滋賀大学生涯学習教育研究センターは、滋賀県教育委員会と共同して、大津市をモデル地域とし、「環境問題」を中心とす

る、成人のための体系的学習支援システム「淡海生涯カレッジ」(琵琶湖学習コース)を開設した⁽²⁾。

そこでは、「環境問題」の学習機会を提供する四つの機関の守備範囲が決められている。すなわち、公民館が「問題発見講座」(5回)を、高校および大津市生涯学習センターが「実験・実習講座」(5回)を、そして大学が「理論学習講座」(10回)を、それぞれ担当する。学習者は、まず、「問題発見講座」で講義や討論を通して「環境問題」についての日頃の問題意識をより確かなものにし、続いて「実験・実習講座」で体験的な学習を行い、「環境問題」を現実生活に結びつけて理解する。そして最後に、「理論学習講座」を受講することにより、理論と実践とのつながりを掘り下げて理解し、それまでの「環境問題」の学習の総まとめを行う、といった具合にである。

このような「体系的な学習支援システム」のアイデアは、現実存在する学習機会のそれぞれの特性を析出し、それらの特性を組み合わせ再構成することによって生まれた。すなわち、人々は、日頃から様々な学習機会を利用して「環境問題」の学習を行っている。大学の公開講座、公民館の講座・学級、その他各種の講演会、それにボランティア活動などを通して無意識的に学ぶ偶然的学習機会も含めると、ずいぶん沢山の学習機会を利用して学んでいる。だが、それらの学びは、それぞれ単発的で内容も重複しており、しかも入門的な内容に止まっていることが多い。そのため人々の日常の学習は、著しく体系性を欠き、学習欲求の高度化にも対応しきれていない場合が多い。その点では、様々な学習機会の特性を生かしつつ、それらを結びつけることこそ重要である。「淡海生涯カレッジ」は、そこに着目したアイデアであり、その実証としての実験的試みである。

実験的段階を終えたこの試みは、今、四つの地域で実践され、テーマについても広がりを見せ始めている。それは、「地域生涯大学システム」の開発という、より広い文脈での研究を触発し刺激している。

注:

- (1) 詳しくは、片岡徳雄、住岡英毅『見る・集まる・学ぶーテレビ学習から地域づくりへー』日本放送出版協会、1981年、pp.142-173
- (2) 詳しくは、滋賀大学生涯学習教育研究センター『環境問題についての生涯大学シ

システムに関する研究－淡海生涯カレッジの開発とその成果－』1998年，神部純一
「成人の体系的学習支援システムに関する研究－淡海生涯カレッジの開発とその成
果－」日本生涯教育学会年報第18号『生涯学習の施策と環境の総点検』1998年，
pp.137-155 など